

「日々の理科」(第 2399 号) 2021, -2, -5

## 「雪のあし跡5 (ツグミ)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

冬に野鳥が地上(雪上)に降りるのは、ほぼ100%エサを求めるためと言って良い。雪のない季節は、ヘビという天敵が多く地上は危険だが、冬は比較的安全なのだろう。しかし、雪の上では目立つので、猛禽類に狙われることもある。フクロウのペリット(口から吐き出した未消化物の塊)には、鳥類(カラ類が多い)の骨や羽毛がよく含まれている。



アカマツの根元に、たくさんの野鳥のあし跡が残っていた。1羽や2羽ではなさそうで、根元のうろ(樹洞)にも出入りしているようだ。巣ではないので、ここでマツの種子を探しているのだろう。



翌日にあし跡の主がわかった。目の下に白い模様ががあるので、最初は「ホオジロ」のようにも見えたが、ホオジロにしてはやや大きい。



マツの根元に集合をかけていたのは「ツグミ」であった。[ツグミ \*Turdus eunomus\*](#) はヒタキ科の野鳥で、日本では冬によく見られる。シベリアなどから越冬の為に渡ってくるのだ。



至近距離で撮影しているのだが、あまり人を恐れていない。明らかにこちらの存在に気付いているのだが、むしろ威嚇するような姿勢も見せていた。



この日は7~8羽ほどのツグミが見られた。日本に渡ってきたツグミは、まず山地の森で群れを形成し、その後平地や丘陵地に散っていくらしい。このあたりでは長期間は見られないのかも知れない。